

金はなくても人が資本 — 吉本せいと『花のれん』 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

ベストセラー作家の山崎豊子の出世作となったのが直木賞を受賞した長編小説『花のれん』だ。主人公のモデルは吉本興業の創業者である吉本せい（1889-1950）で何度も舞台化、映画化、ドラマ化されている。

米屋の利発な娘として育ったせいは家庭雑貨を扱う荒物問屋の吉本吉兵衛と結婚したものの、夫は演芸好きの道楽者で店を潰してしまう。それを契機に素人でありながら寄席経営に乗り出し、会社を立ち上げ、吉兵衛の急逝後も「女太閤」と呼ばれて全国に轟く笑いの王国を築き上げる。

そんなせいの生きざまを『花のれん』は波乱に富んだ大阪商人の孤軍奮闘の物語に仕立て上げた。むろん小説は事実ではなく美化されている点も多分にあるだろう。しかし女興行師として全身全霊を賭けた吉本せいの不屈のスピリットは充分に伝わってくる。巷にあふれる凡百のビジネス書より学ぶものは少なくないはずだ。

究極のプラス思考

『花のれん』ではヒロインが多加、夫は船場の呉服商の吉三郎と設定されている。吉三郎は家業に身を入れず、芝居や剣舞に凝り、ひいきの芸人に入れあげて金を浪費する道楽者だ。当然のように多大な借金を抱えて店は倒産する。

ふつうならここで離婚するか、ダメ亭主を支えて働きに出るという展開になりがちだ。だが多加の発想はまるで違う。それほど道楽が好きなら、本業にしようかと勧めるのだ。

「いっそのこと、毎日、芸人さんと一緒に居て商売になる寄席しはったらどうだす」

資金がないと渋る吉三郎を多加はこう説得する。

「おます、おますやないか、芸人狂いで身上を潰したその道楽が資本だす。芸人さんに売りはったその顔と付合いが結構な資本になりますやないか」と。

これは究極のプラス思考とっていい。店を潰したマイナス要因を一気にプラス要因として反転させている。

多加の提案はプラス要因の根拠を明確に示していることで単なる思いつきでないことがわかる。夫が道楽で得た芸人たちとの深い人間関係が資本だというのだ。



吉本せい

金はなくても人が資本になるという発想は多加がきわめて有能な商才の持ち主であることを示唆している。原点としての人を動かす商売は徐々に実を結び、やがて大輪の花を咲かせていく。

白い喪服に込めた決意

吉三郎が最前にしていた剣舞師の通称ガマ口の手を借りて場末の寄席を買い取ったとき、落語界の主流は桂派と三友派に二分されていた。名の通った真打は独占され、多加たちのような新参者が入り込む余地はない。

苦肉の策として仕事のない若手を起用し、物真似、講談、音曲、剣舞などの色物を織り交ぜ、木戸銭も一流の寄席の半額にした。いまでいう差別化戦略だ。それでも客足は芳しくない。

資金繰りのために多加は毎日、小金持ちで偏屈な年寄りの石川きんを銭湯で待ちかまえて背中を流し、多額の借金に成功する。

寄席では飲食物の販売に眼をつけて店内だけでなく表にも売店を出して通行人に呼びかけた。猛暑の夏、冷し飴を氷のなかに埋める工夫をして評判になり、多くの客が詰めかけるようになる。

商売が軌道に乗ると吉三郎の遊び癖が復活し、ついには妾宅で急死する。29歳で子持ちの寡婦となった多加は筆筒の底から引き摺り出した白い喪服を着る。

嫁ぐときに父が「船場の商家で夫に先だたれ、一生二夫に見えぬ御寮人さんは、白い喪服を着てこころの証をたてるしきりがある」と前置きして手渡したものだ。

葬儀に参列した人々は白い喪服を着た多加の姿を見て「厳しい女のこころを、涙ぐましい思いで認めた」。白い喪服は商売一筋に生きようとする女の悲愴な決意を示していた。

芸人を気遣う真心

吉三郎の死後、多加はさらなるレベルアップをめざして人気のある真打の獲得に執念を燃やす。

彼らがよく使う乗り換え電車の近くの公衆便所に身をひそめ、偶然の出会いを装って「師匠、これ、ほんのおしるしで、お気が向きましたらどうぞ、うちへもお運びを——」と五円札を懐へ押し込んでいく。これがまた評判を呼び、多加の寄席は名高い真打も出演する花菱亭として多店化し、一流の仲間入りを果たす。

しかし金だけで人は動くものではない。人が資本を信条とする多加には芸人たちを本気で気遣う真心があった。

大正12年（1923）9月1日、関東大震災が発生した際、多加は大量の米と毛布を携え、翌日の夜行で東京へ向かう。ようやく上野駅にたどり着くと焼け野原を歩いて名人の柳家小さんを探し出す。

「『師匠、よう御無事でいてくれはりまして、大阪から駆けつけた甲斐がおました』

多加は雨の通った合羽を土間に脱ぎ捨て、玄関の畳の上へ体を擦りつけるようにして挨拶した」

多加の誠意に小さんは「みな大阪へ逃げて行く時、反対に大阪から女の席主のあなたが来て下さって…、命がけですよ、こんな東京へ今来るのは」「何の恩愛もないのに、こうまでして戴いて、東京の落語家たちは、生涯忘れりゃ致しませんよ」と目尻に涙を滲ませ、膝の上に両手を揃えて深く頭を垂れた。

多加の商売の根底には損得勘定で割り切れない血の通った人間への慈しみの情が流れていた。それは作者の山崎豊子が吉本せい自身の生きざまから感じとったものにほかならない。

昭和に入って戦争による不景気が拡大すると、せいは経営難で倒産寸前となっていた大阪名物の通天閣を買い取った。通天閣は昭和18年（1943）の火災で大半が焼け落ち、約300トンにのぼる鉄屑は軍の金属回収令で戦場に送られることになった。しかし鉄屑を収蔵していた兵器工場が昭和20年（1945）の大阪大空襲で破壊され、すべて溶解してしまう。

せいは結果的に当時で25万円もの大損害を被ることになる。常人ならひどく落胆するところだ。ところがせいは「ああよかった。人を殺すタマにならなくて、ほんまによかった」と胸を張った。